

再確認傾向者における対人ネットワーク利用と 精神的健康の関連

安部 主晃
(2016年10月6日受理)

Relationships Between Interpersonal Networks
and Mental Health in High Reassurance Seekers

Kazuaki Abe

Abstract: The current study sought to examine the relationships between reassurance seeking and mental health from the perspective of “emotionships”. High reassurance seekers repeatedly seek reassurance from significant others. Although previous studies reported that interpersonal rejection by significant others mediated relationships between reassurance seeking and mental health, the mechanisms underlying this relationship remain unclear. Thus, the current study examined the relationships between reassurance seeking and mental health using the framework of “emotionships”, which are the structures of interpersonal networks involved in emotion regulation. The findings of previous studies suggest that high reassurance seekers may have narrow interpersonal networks for emotion regulation, resulting in worsening mental health. The results of a questionnaire survey of 56 students indicated that those who engaged in reassurance seeking tended to have fewer emotional domains and interpersonal networks for interpersonal emotion regulation. In addition, interpersonal networks for emotion regulation were positively correlated with well-being. These findings indicate that maintaining interpersonal networks for interpersonal emotion regulation may be important to prevent the deterioration of mental health for reassurance seekers.

Key words: reassurance-seeking, emotionships, mental health

キーワード：再確認傾向, Emotionships, 精神的健康

問題

1 はじめに

精神的健康と、周囲の人々との対人関係には密接なつながりがある。実際、多くの研究によって良好な対人関係が精神的健康にポジティブな影響を及ぼす一方で、対人関係の悪化がネガティブな影響を及ぼす

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：中島健一郎（主任指導教員）、森永康子、岡本祐子、杉村和美

ことが明らかにされている (Magaro & Weisz, 2006 ; Thompson & Berenbaum, 2009)。

他者との対人関係を悪化させる個人特性の一つとして、Joiner, Alfano, & Metalsky (1992) は、重要他者に対して自分の価値を繰り返し確認する傾向である再確認傾向 (reassurance seeking) を挙げている。本研究では、再確認傾向の高い個人が、様々なタイプの感情を制御する時にどのような対人ネットワークを利用しているかという点に着目し、再確認傾向と精神的健康の観点について感情制御時の対人ネットワーク利用 (Emotionships) の観点から検討を試みる。その際、対人ネットワーク利用が抑うつと主観的幸福感という精

神的健康の異なる側面に影響を及ぼすプロセスについて検討する。

2 再確認傾向と精神的健康

再確認傾向とは、自分は愛されているのか、自分は価値がある存在なのかについて、重要他者に対して過度に確認を求める、比較的安定した傾向である (Joiner et al., 1992)。再確認傾向は Coyne (1976) が「抑うつ」の対人理論」に基づき概念化したものである。Coyne (1976) によると、恋人や家族、親友などの重要他者に自分の価値を何度も確認する者は、重要他者からその価値を保証されても、保証を疑い、何度も確認を繰り返すため、重要他者から拒絶されるという。

先行研究では再確認傾向と精神的健康との関連について検討し、抑うつとの間に正の相関関係があることを示している (安部・川人・大塚, 2014; Evraire & Dozois, 2011; Joiner et al., 1992; Joiner, Metalsky, Katz, & Beach, 1999; 勝谷, 2004)。その中で Starr & Davila (2008) は、再確認傾向と抑うつとの関係を調べた38の研究についてメタ分析を実施し、再確認傾向と抑うつとの間に正の相関関係が一貫して認められることを明らかにしている。

個人の精神的健康の悪化を予防する臨床的介入の視点から捉えた場合、精神的健康に影響を及ぼす一連のプロセスを明らかにし、さらにそれを介入方法に生かすことが重要と考えられる。従来の研究では、再確認傾向が精神的健康を悪化させるメカニズムについて、恋人や親友などの特定の重要他者からの拒絶に着目した検討が行われてきた (Joiner et al., 1992; Katz, Beach, & Joiner, 1998; Potthoff, Holahan, & Joiner, 1995; Stewart & Harkness, 2015)。その中で勝谷 (2006) は、再確認傾向と、気分の落ち込み時の対処方略との関連について検討し、再確認傾向の高い者は、気分の落ち込み時に、重要他者に対して、主に自身の感情に焦点を当てた働きかけ (e.g., 気晴らし, 感情ぶちまけ, 情動的サポート要請) や、一人での非対人的対処 (e.g., 考え込み, 気晴らし) を行う傾向にあること、そして再確認傾向によって規定された重要他者に対する働きかけは、重要他者からの拒絶を引き起こし、その結果、精神的健康が悪化することを明らかにしている。このことから、再確認傾向の高い者は、気分の落ち込み時に、重要他者に対して対人的な感情制御を目的とした関わりを行っており、その他の対人ネットワークは十分に利用していないことが推測される。そして重要他者の負担が増えることによって、彼ら彼女らからの拒絶が引き起こされる可能性が考えられる。

しかしながら、勝谷 (2006) の研究では、気分が落ち込んだ時の対象方略のみに着目しており、その他の

感情の制御場面については想定されていない。また、他者の特徴について、重要かそうではないかという違いに基づき検討しており、感情制御のために関わろうとする他者の人数などの量的な違いは考慮していない。そのため、再確認傾向の高い者がどのような対人的な感情制御を行っているのか、その検討は未だ十分とは言えない。この点を踏まえ、本研究では再確認傾向と精神的健康との関連について、感情制御のための対人ネットワークの利用という観点から検討を行う。

3 Emotionships —感情制御のための対人ネットワーク利用

感情制御 (emotion regulation) とは、個人が目標を達成するために、感情的反応のモニタリング、評価、修正を瞬間的に行う、外的・内的なプロセスとされている (Thompson, 1994)。従来の研究では、個人が自身の感情の生起や表出を制御する、個人内の感情制御に焦点が当てられていた (Gross, 2002)。しかし、養育者や友人など、他者との相互作用が、個人の感情に影響を与えるという膨大な知見があることを踏まえ、近年では、個人の感情が他者の存在によって制御される、すなわち対人的感情制御に注目が集まっている (Hofmann, 2014; Coan, 2011; English, John, & Gross, 2013; Rime, 2009)。さらに、Rime (2009) は、他者とのネガティブな感情の共有が、短期間のストレス改善などの効果をもたらすことを明らかにしており、対人的感情制御が精神的健康に影響を及ぼすことが指摘されている。

この点に関して Cheung, Gardner, & Anderson (2014) は、人々が感情制御を目的として、様々な他者との関係性を利用することを示し、精神的健康にとって、感情制御を目的とした他者とのネットワークが重要な意味を持つことを明らかにした。特定の親密な他者が、感情制御のために求められることに耐えられない場合、多様な対人ネットワークがあることで、別の他者を利用して対人的感情制御を行うことができるためである。Cheung et al. (2014) は、このような対人ネットワーク構造として、Emotionships という概念を提唱した。Emotionships とは、個人が様々な感情を制御する際に利用する、対人ネットワーク構造の総称であり、emotion regulation と interpersonal relationship を組み合わせた造語である。

Cheung et al. (2014) は、Emotionships の構成要素のうち、様々な感情領域の中で対人的な感情制御を行う領域の多さと、対人ネットワークの中で特定の感情の制御に特化した他者の多さが、主観的幸福感と正の相関関係をもつことを示した。Emotionships は、様々な感情の制御を想定しており、特定の重要他者のみ

らず、それぞれの感情の制御における対人ネットワークの量的な側面を含んだ概念である。そのため、再確認傾向の高い者が、対人的な感情制御を目的としてどのように他者と関わっているかを明らかにするためには、Emotionships という概念を用いた検討が有用と考えられる。

前述したように、先行研究では再確認傾向が恋人や親友などの特定の重要他者からの拒絶や、葛藤事態を引き起こすことに焦点が当てられてきた (Stewart & Harkness, 2015)。これらの研究は、再確認傾向が特定の重要他者との関係に及ぼす影響を検討するという点で意義があるものの、同時により広範な対人的ネットワークの観点からの検討がなされていないという課題がある。例えば、再確認傾向が高い者が様々な感情の制御時に対人ネットワークを十分に利用できず、感情制御場面で特定の他者に集中して働きかけることで拒絶を招き、精神的健康が悪化する可能性が考えられる。また、再確認行動により特定の他者から拒絶された際に、それ以外の人々を対象とした対人的感情制御を利用できないことが精神的健康に対して悪影響を及ぼす可能性も考えられる。しかし、先行研究では再確認傾向の高い人々が有する対人ネットワークの一側面を切り取り、その中で影響過程に着目するに留まっている。それがゆえに、この可能性について検証できていない。特定の重要他者を含めた対人ネットワークの中で、再確認傾向の高い人々がどのような感情制御を行っているのか、そして結果として精神的健康にどのような変化が生じるのか明らかにすることは、彼ら彼女らの理解を深める上で重要な意味を持つと言える。

4 本研究の目的

以上を踏まえ、本研究では再確認傾向が精神的健康に及ぼす影響について、感情制御時に利用する対人ネットワークに着目した検討を実施する。具体的には、再確認傾向と、感情制御時に利用する対人ネットワーク構造 (Emotionships)、精神的健康との関連を検討する。

勝谷 (2006) の知見から、再確認傾向の高い者が対人的な感情制御の対象として重要他者を求める傾向が強く、感情制御時に利用する対人ネットワークが狭いことが予測される。さらに、再確認傾向の高い者は、一人での非対人的対処を行う傾向も高いことから、対人的な感情制御を行う領域が狭いことも考えられる。

以上より、本研究の予測は次の2つである。まず、再確認傾向が高いほど、Emotionships における感情領域が狭く、平均人数が低く、個別度が低いことが予想される (予測1)。次に、Cheung et al. (2014) の知

見から、Emotionships の指標が主観的幸福感と正の関連を示し、抑うつと負の関連を示すことが予想される (予測2)。

方法

1 参加者

2015年12月に A 県内の B 大学に所属する学生56名 (女性29名；平均年齢20.1歳) を対象とした。

2 手続き

書面による調査協力の同意を得たうえで、講義時間の一部を利用して質問紙調査を実施した。調査への回答を依頼する際には、データの処理に関して説明を行い、本調査への回答によって参加者に一切の不利益を被ることがないことを保証した。

3 測定指標

Emotionships Cheung et al. (2014) の手続きに沿って測定した。初めに、“人はときどき、ある特定の感情状態の中に自分を置きたいと思うことがあります。そして、私たちは、特定の感情状態に自分を置くために、周囲の人々 (例：友人、家族、恋人) の力を借りようとする場合があります” という教示文を呈示した。その後、7つの感情制御場面 (不安を和らげる場面；悲しみを励ます場面；怒りを鎮める場面；幸せを実感する場面；怒りを強める場面；罪悪感を減らす場面；恥ずかしさを和らげる場面) のシナリオを提示した。そして、そのときに一緒にいたいと思う人物のイニシャルを、最大4名まで、思い浮かんだ順に記入するよう求めた。この際、複数のシナリオ間で、同じ人物のイニシャルを記入してもかまわないと教示した。

7つの感情制御場面のシナリオの中で、1人以上の人物のイニシャルが記入されたシナリオの数を、a) 感情領域の広さ、として算出した。また、それぞれの感情制御シナリオで挙げられた他者の合計人数 (Total emotionships: 最大28名で重複あり) を、感情領域の広さで割った値を、b) 平均人数、とした。さらに、他のシナリオで重複して名前が挙げられず、特定の感情シナリオでの名前が挙げられた他者の人数を、全体の合計人数で割った値を、c) 個別度、として算出した。さらに、Dr. Cheung との personal communication を通して、全ての感情制御シナリオで挙げられた他者の合計人数について d) Total emotionships (重複あり)、e) ネットワークの人数 (重複なし) の指標として用いた。なお、Total emotionships とネットワークの人数に関する分析結果は、Cheung et al (2014) では報告されていないが、本研究では全体的な対人ネットワークの大きさの指標として分析に用いることとした。

抑うつ The Center for Epidemiology Studies Depression Scale (Radloff, 1977) の日本語版 (島・鹿野・北村・浅井, 1985) を用いた。抑うつ症状を測定する20項目からなる尺度で、1から4の4件法で回答を求めた。得点が高いほど、抑うつ の重症度が高いことを示す。

主観的幸福感 Satisfaction with Life Scale (Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985) の邦訳版 (大石, 2009) を用いた。4項目からなる1から7の7件法の尺度で、得点が高いほど主観的幸福感が高いことを示す。

再確認傾向 改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度 (勝谷, 2004) を用いた。日頃の重要な他者に対する再確認傾向を測定する12項目の尺度である。再確認願望 (例: “自分のことを受け入れてくれるのかどうか確かめたい”) と再確認行動 (例: “自分を好きかどうか確かめても、さらに相手に尋ねたり、あるいは相手を試すようなことをする”) の2因子、各6項目に対して1から7の7件法で回答を求めた。得点が高いほど再確認傾向が高いことを示す。

個人属性 性別, 年齢, 学年に対する回答を求めた。

結果

1 記述統計

各測定尺度の記述統計量を算出した。結果を Table 1 に示す。再確認願望と再確認行動、抑うつ、主観的幸福感の各尺度について許容できる内の一貫性があることが確認された。Emotionships の指標のうち、感情領域の広さの平均値は6.07 (得点範囲は2-7)、個別度の平均値は0.19 (得点範囲は0-0.9) であり、どちらも分布に偏りが認められた。感情領域の広さは、最大値に30名の参加者が分布しており、天井効果が認められた。個別度は0-0.05の区間に15名の参加者が分布しており、床効果が認められた。

2 再確認傾向, Emotionships, 精神的健康の相関

再確認傾向と Emotionships, 精神的健康との関連

Table 1 各測定指標の記述統計値

	<i>M</i>	<i>SD</i>	最小値	最大値	<i>α</i>
再確認願望	27.79	6.52	8	42	.78
再確認行動	21.86	6.57	10	38	.71
抑うつ	38.66	10.09	21	66	.88
主観的幸福感	18.16	6.76	5	31	.87
Emotionships					
Total Emotionships	15.30	5.82	4	28	-
ネットワークの人数	6.05	2.68	3	19	-
感情領域の広さ	6.07	1.26	2	7	-
平均人数	2.50	0.76	1	4	-
個別度	0.19	0.16	0	0.57	-

を検討するための相関分析を行った。なお、分布に偏りの認められた感情領域の広さと個別度については、スピアマンの順位相関係数を算出した。結果を Table 2 に示す。まず、再確認願望と再確認行動は、いずれも抑うつと正の相関関係を示した ($r=.35, p<.05, 95\% CI=.10-.56$)。しかし、主観的幸福感との間には、有意な相関は認められなかった。

次に、再確認傾向と Emotionships との関連では、再確認行動が、Total emotionships と負の相関関係 ($r=-.23, p=.08, 95\% CI=-.46-.04$)、および、感情領域の広さと負の相関関係を示した ($r_s=-.27, p<.05, 95\% CI=-.52-.03$)。また、emotionships の指標間の関連も認められ、感情領域の広さは、Total emotionships と正の相関関係を示した ($r_s=.67, p<.001, 95\% CI=.47-.78$)。

さらに、Emotionships と精神的健康の関連については、主観的幸福感が、Total emotionships と、正の相関関係を示し ($r=.25, p=.07, 95\% CI=-.06-.45$)、個別度と負の相関関係を示した ($r_s=-.24, p=.08, 95\% CI=-.47-.03$)。一方、Emotionships の指標と抑うつとの間には有意な関連は認められなかった。

3 再確認傾向が精神的健康に及ぼす影響

再確認行動が Emotionships を介して精神的健康に影響を及ぼすモデルについて、構造方程式モデリングによる検討を実施した。理論的背景と相関分析の結果に基づき、Total emotionships と感情領域の広さを媒

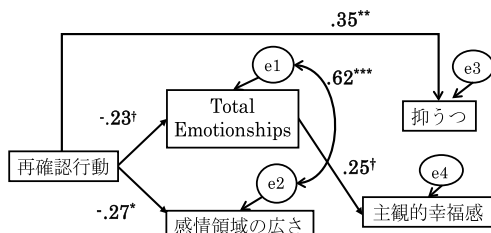
Table 2 各測定指標間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 再確認願望	—								
2. 再確認行動	.68**	—							
3. 主観的幸福感	-.14	-.19	—						
4. 抑うつ	.35**	.35**	-.34**	—					
5. Total Emotionships	-.01	-.23 ⁺	.25 ⁺	-.15	—				
6. ネットワークの人数	.03	-.08	-.10	.07	.44**	—			
7. 感情領域の広さ	-.11	-.29*	.12	-.13	.65**	.38**	—		
8. 平均人数	.00	-.14	.18	-.11	.83**	.43**	.20	—	
9. 個別度	-.03	.13	-.24 ⁺	.05	-.59**	.29*	-.42**	-.44**	—

注) ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

介変数とし、抑うつおよび主観的幸福感を予測するモデルを設定した。なお、Total emotionshipsと感情領域の広さは、ともにEmotionshipsの指標であり、高い正の相関関係が認められている。この点を踏まえ、誤差項間に相関を仮定した。結果をFigure 1に示す。

構造方程式モデリングの結果、非有意なパスを削除したモデルにおいて、十分な適合度が認められた(GFI=.956, AGFI=.867, CFI=.956, RMSEA=.082)。再確認行動は、Total emotionshipsと負の関連を示し($\beta = -.23, p < .10$)、さらにTotal emotionshipsは主観的幸福感と正の関連を示した($\beta = .25, p < .10$)。一方で、抑うつについては、Emotionshipsとの有意な関連は認められず、再確認行動との間に正の関連が示された($\beta = .35, p < .01$)。



注)*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$
GFI=.956, AGFI=.867, CFI=.956, RMSEA=.082

Figure 1. 再確認傾向, Emotionships, 精神的健康の関連の構造方程式モデリング

考察

1 再確認傾向と Emotionships の関連

本研究の目的は、再確認傾向と精神的健康の関連について、感情制御時に利用する対人ネットワークに着目した検討を行うことであった。調査的検討の結果、再確認行動の高い者ほど、感情領域が狭く、Total Emotionshipsが少ないことが示され、予測1は一部支持された。この結果から、勝谷(2006)の知見がemotionshipsの観点からも支持されたと解釈できる。すなわち、再確認行動を行うほど、対人的な感情制御の対象となる感情領域が少なく、そのための対人的な資源が不足していると考えられる。Hames, Chiurliza, Podlogar, Smith, Selby, Anestis, & Joiner (2015)は、再確認傾向の高い者が、自分の存在が周囲の他者に対して負担になっているという感覚が強く、周囲とつながっているという感覚が低いことを報告している。この知見を考慮すると、再確認傾向の高い者は、周囲の他者に対する負担感が強く、様々な感情の制御に迫ら

れた際に、負担感から特定の重要他者以外の対人ネットワークを十分に利用しないと考えられる。

2 Emotionships と精神的健康の関連

Emotionshipsと精神的健康の関連について、Total emotionshipsが少ないほど、主観的幸福感が低いことが示唆された。これは予測2を一部支持する結果である。様々な感情制御場面で求める他者が多いほど、精神的健康が高いことが示唆された。Emotionshipsが精神的健康と関連するというCheung et al. (2014)の知見が一部支持されたと言える。一方、本研究では、個別度が高いほど主観的幸福感が低いという、Cheung et al. (2014)の結果とは矛盾する結果も示唆された。本研究におけるEmotionshipsの指標間の関連に着目した場合、個別度はTotal Emotionshipsと感情領域、平均人数との間に負の関連が認められた。したがって、個別度が高いほど、対人的なネットワーク全体の大きさが小さくなり、精神的健康が低下する可能性が考えられる。

一方、Emotionshipsの指標と抑うつの関連に着目した場合、両者に有意な関連は認められなかった。主観的幸福感と抑うつに対する再確認傾向の影響過程に異なる結果が得られたことから、再確認傾向が精神的健康に影響を及ぼすメカニズムとして、2つの過程が存在する可能性がある。再確認傾向がEmotionshipsを介して精神的健康の肯定的な側面を棄損させるプロセスと、Emotionshipsを介さず精神的健康の否定的な側面を悪化させるプロセスである。これまでの研究から、抑うつは、重要な他者からの拒絶を含む対人的なストレスイベントとの間に強い関連があることが報告されている(Magaro et al., 2006; Thompson et al., 2009)。再確認傾向から抑うつ傾向への直接パスが認められた背景には、重要他者からの拒絶がその媒介変数となっている可能性がある。今後は、拒絶の認知の影響も含めて、この二重過程が確かなものかどうか、その再現性について検証することが必要と考えられる。

3 まとめと今後の課題

これまでの研究では、再確認傾向が特定の重要他者からの拒絶を招くために、精神的健康が悪化するという説明が一般的であった。本研究の重要な点は、再確認傾向と精神的健康との関連が、対人ネットワークにおける感情制御資源の観点からも説明できることを示唆した点にある。

再確認傾向の高い者が、特定の重要他者以外の対人ネットワークを広げることは、精神的健康のさらなる棄損を予防するためにも必要であると考えられる。例えば、再確認傾向の高い者が精神的健康を維持するた

めには、重要他者への再確認行動を改善するだけでなく、感情制御のために利用する対人ネットワークを広げることも重要と考えられる。そのためには、再確認傾向の高い者が周囲に対して抱く負担感を緩和し、特定の重要他者以外の対人ネットワークを利用することを促す介入が有効であろう。

また、再確認傾向の高い者は、感情制御時に利用する対人ネットワークが小さいため、重要他者側の態度や特性もまた、精神的健康にとって重要な役割を果たすことが推察される。例えば、重要他者が拒絶的な態度を示しやすい場合、再確認傾向の高い者はさらに負担感を強め、対人ネットワークを利用しなくなる可能性が考えられる。一方で、重要他者が受容的な態度を示しやすい人であれば、再確認傾向の高い者は負担感を強めず、利用する対人ネットワークも維持される可能性が考えられる。そのため、再確認傾向の高い者にとっての重要他者や、臨床的介入を行う専門家が受容的な態度で関わることで、再確認傾向の高い者の Emotionships が維持され、精神的健康が保たれる可能性が考えられる。

今後は、より大きいサンプルサイズで追加調査を行い、本研究の知見の再現性を確認する必要がある。さらに、本研究では、Emotionships という、感情制御時に利用するネットワーク構造に着目したが、他者に対して実際に感情制御が行われたかどうかは検討していない。精神的健康への影響をより詳細に検討するためには、再確認傾向の高い者が、重要他者との狭いネットワークの中で感情制御を実際に行っているのかどうか、そしてその帰結として何が起きているのか、検証する必要がある。その方法として、経験抽出サンプリングを用いた調査的検討が有用だろう。以上2点についての追加検討を行い、再確認傾向と精神的健康の関連についてより理解を深め、その知見を臨床的介入に生かすことを目指す必要があると考えられる。

【引用文献】

- 安部主晃・川人潤子・大塚泰正 (2014). 再確認傾向が対人ストレスイベント及び精神的健康に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 23, 29-37.
- Cheung, E. O., Gardner, W. L., & Anderson, J. F. (2014). Emotionships: Examining people's emotion-regulation relationships and their consequences for well-being. *Social Psychological and Personality Science*, 6, 950-958.
- Coan, J. A. (2011). The social regulation of emotion. In J. Decety & J. T. Cacioppo (Eds.), *Oxford handbook of social neuroscience* (pp. 614-623). New York: Oxford University Press.
- Coyne, J. C. (1976). Toward an interactional description of depression. *Psychiatry*, 39, 14-27.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-75.
- English, T., John, O., & Gross, J. (2013). Emotion regulation in close relationships. In J. A. Simpson & L. Campbell (Eds.), *Oxford handbook of close relationships* (pp. 500-513). New York: Oxford University Press.
- Evraire, L. E. & Dozois, D. J. A. (2011). An integrative model of excessive reassurance seeking and negative feedback seeking in the development and maintenance of depression. *Clinical Psychology Review*, 31, 1291-1303.
- Gross, J. J. (2002). Emotion regulation: Affective, cognitive, and social consequences. *Psychophysiology*, 39, 281-291.
- Hames, J. L., Chiurliza, B., Podlogar, M. C., Smith, A. R., Selby, E. A., Anestis, M. D., & Joiner, T. E. (2015). Perceived burdensomeness and thwarted belongingness predict excessive reassurance seeking among clinical outpatients. *Journal of Clinical Psychology*, 71, 597-605.
- Hofmann, S. G. (2014). Interpersonal emotion regulation model of mood and anxiety disorders. *Cognitive Therapy and Research*, 38, 483-492.
- Joiner, T. E., Alfano, M. S., & Metalsky, G. I. (1992). When depression breeds contempt: Reassurance seeking, self-esteem, and rejection of depressed college students by their roommates. *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 165-173.
- Joiner, T. E., Metalsky, G. I., Katz, J., & Beach, S. R. (1999). Depression and excessive reassurance-seeking. *Psychological Inquiry*, 10, 269-278.
- 勝谷紀子 (2004). 改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度の信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 13, 11-20.
- 勝谷紀子 (2006). ネガティブライフイベントへの不適応な対処行動：重要他者に対する再確認傾向の役割 社会心理学研究, 21, 213-225.
- Katz, J., Beach, S. R. H., & Joiner, T. E. (1998). When does partner devaluation predict emotional distress? Prospective moderating effects of reassurance-seeking and self-esteem. *Personal*

- Relationships*, 5, 409-421.
- Magaro, M. M., & Weisz, J. R. (2006). Perceived control mediates the relation between parental rejection and youth depression. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 34, 867-876.
- 大石繁宏 (2009). 幸せを科学する—心理学からわかったこと— 新曜社
- Potthoff, J. G., Holahan, C. J., & Joiner, T. E. (1995). Reassurance seeking, stress generation, and depressive symptoms: An integrative model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 664-670.
- Radloff, L. S. (1977). The CES-D scale: A self report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, 1, 385-401.
- Rime, B. (2009). Emotion elicits the social sharing of emotion: Theory and empirical review. *Emotion Review*, 1, 60 – 85.
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について *精神医学*, 27, 717-723.
- Starr, L. R., & Davila, J. (2008). Excessive reassurance seeking, depression, and interpersonal rejection: A meta-analytic review. *Journal of Abnormal Psychology*, 117, 762-775.
- Stewart, J. G., & Harkness, K. L. (2015). The interpersonal toxicity of excessive reassurance-seeking: Evidence from a longitudinal study of romantic relationships. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 34, 392-410.
- Thompson, R. A. (1994). Emotion regulation: A theme in search of a definition. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 59, 25-52.
- Thompson, R. J., & Berenbaum, H. (2009). The association between rejection and depression in the context of women's relationships with their parents. *Journal of Social and Personal Relationships*, 26, 327-339.